（論文）

無関心という悪

本　多　峰　子

I　悪の問題、悪とは何か

悪の問題を考える時に問題になるのは、第一に、なぜこの世にはこのような悪や苦しみがあるのか、であり、また第二におそらくそれよりも重要な問題として、われわれは一体いかにしてこの世の苦しみや悪を克服できるのか、である。

しかし、そもそも悪とは一体何であろうか。西欧ラテンキリスト教の代表的教父であるアウグスティヌス（354－430）は、悪を善の欠如あるいは歪曲と見た。

> 悪と呼ばれているものはすべて、壊敗以外の何者でもない［…］知識のある魂の壊敗は無知と呼ばれ、思慮ある魂の壊敗は軽率と呼ばれ、正しい魂の壊敗は不正と呼ばれ、［…］さらに生命の身体において、健康の壊敗は、苦痛および病気と呼ばれ、［…］物体だけについていえば、美しさの壊敗は醜さと呼ばれ、真直の壊敗は歪みと呼ばれ、秩序の壊敗は乱雑と呼ばれ、完全性の壊敗は分離とか分裂とか減少と呼ばれる。しかしながら、壊敗が害するとは、本性的な状態を破壊することにほかならず、したがって、それは本性ではなく、本性に反するものであることを見るのは容易である。[1]

人間の罪についてはアウグスティヌスは、最初の人間アダムとエバが神に背き、神から禁じられていた木の実を食べてしまったことを、神に与えられた自由意志の濫用による不服従の罪と解釈し、これが人間悪の起源であり、人間の原罪だと考えた。

> 神は、人間をいわば天使と獣たちとの中間に位置する自然本性を持つものとしておつくりになったのである。つまり、人間がその創造主に対してみずからの真実の主として従順であり、敬虔な心で服従して、その方の命じるところを守るかぎり、かれは天使たちとの共同の生に加わって、死が介入してくることもない終わりなき至福の不死性を確保することになっていたのである。しかし、その人間が自らの自由な意思を濫用して主であり神である方を傲慢と不従順によって損なうかぎり、かれは死を宣告されて欲望の僕となって、死後も永遠なる責苦にさいなまれるよう定められ、獣のように生きることに

なっていたのである。[2]

神への不服従が悪であり罪であるという考えは、旧約聖書にさかのぼり、ユダヤ＝キリスト教の根幹にある。旧約の創世記では、人間は神に造られ、この世界のすべては神によってなったことが示される。神は人間を形造った後、自分の息を吹き込んで人に命を与えた（創世記 2:7）。それゆえ、神に背くことは、人間にとっては、自分の命の与え手、命の源に背くことである。さらに出エジプト記では、イスラエルの民はエジプトでの苦役の奴隷生活から神によって救われ、モーセを通して神に律法を授与された。この律法は古代オリエントの宋主権条約のパターンで、主の恵みが先立ち民がそれに応えて主に従うことを誓うというように、神の側からの恩寵が先立ち民の服従がその応答として求められている。ここから、神への背きは自らの救済者に背くことにもなった。

神がモーセに与えたいわゆる十戒の冒頭部分の、十戒の前文にあたる文言は以下のようになっている。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。」（出エジプト記 20:2-6）

これによれば、神を否む者への罰に比して神に従う者にははるかに大きな恵みが約束されており、この掟は暴君的専制君主が君主自身の益のために一方的に無条件の絶対的服従を求めるものというよりは、民にとって有利な形で結ばれる契約と言える。しかも、ここには「私を愛し、私の戒めを守る者には」と、神を愛することがまず重要な要素として挙げられており、神への服従が恐れや無理強いによるのではなく愛からの必然であるべきことが示されている。このようなことから、ユダヤ＝キリスト教では、神以外のもの――たとえば、金銭や社会的地位や権力など――への神への愛以上の過度の執着や愛も悪とされてきた。

5 世紀ごろから西洋ラテンキリスト教の伝統や民間伝承で「七つの大罪」（Seven Deadly Sins）すなわち、死に至る重い罪とされるようになった、傲慢 pride、強欲 greed、嫉妬 envy、憤怒 wrath、色欲 lust、暴食 gluttony、怠惰 sloth の中で最も重い罪は傲慢であり、これは、神よりも自分の方を第一に見て、神にとって代わろうと反逆したルシファー（＝サタン）の罪と考えられている。

このような罪は、「犯す」罪であり、いわば能動的な罪と言える。旧約聖書の十戒は以下の通りである。

あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。
あなたはいかなる像も造ってはならない。

あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。
安息日を心に留め、これを聖別せよ。
あなたの父母を敬え。
殺してはならない。
姦淫してはならない。
盗んではならない。
隣人に関して偽証してはならない。
隣人の家を欲してはならない。（出エジプト 20:3-17）

この大部分は禁止命令からなっており、安息日規定と父母を敬えとの戒律以外はすべて、犯してはならない罪を戒めている。しかも、守るべきと積極的に命じられる安息日も細則として安息日に行なってはならない行為を規定してゆくことになるので、やはり、「～するな」との否定的戒律に見える。罪とは神に背くこと、してはならないことを行なうことなのだ、という印象を与えられる。そのほか、ユダヤ教には「自分が嫌なことは、ほかのだれにもしてはならない」（旧約聖書続編「トビト記」4 章 15 節）との戒めもある。これも、儒教の「己の欲せざるところは、他に施すことなかれ」（孔子「論語」衛霊公第十五 23）などと同様に「してはならない」との、いわば消極的命令である。

実際のところ、ユダヤ教には、「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」（申命記 6:5）、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」（レビ 19:18）が黄金律としてあり、能動的な神への愛と隣人愛が命じられている。しかもこれは、キリスト教においてもイエスによって最も重要な教えと認められている（マタイ 22:37-39; マルコ 12:30）。それでも、隣人愛が実行されない時、それが積極的な罪を犯すことであるという認識は 20 世紀までは目立たなかった。これは、とくに善を行なわないだけのプラスにもマイナスにもならないことと見做されていたように見える。強者が弱者を迫害し、悪人が善人に危害を与えているときにも、他の人々は自分自身を第三者として、下手にそれにかかわらないほうが無難であり、むしろ賢明であると考える人は多かった。本論では 20 世紀の特に第二次世界大戦後、隣人愛の不履行は積極的な罪であるとの意識が西欧諸国で表明されるようになったこと、その意識が今日ブラックライブズマター運動にもつながっており、われわれに意識と行為の変更を求めることを見てゆきたい。

II　見て見ぬふりをすること

エーリッヒ・ケストナーは 1933 年に出版した児童向けの小説『飛ぶ教室』で、「平和を乱すことがなされたら、それをした者だけでなく、止めなかった者にも責任はある」[3] と書いている。作中ではこれは、子ども同士のいたずらを傍観していた同じクラスの子どもに教師が言った言葉で、筋書きの中ではそれほど大きな意味を感じさせないままに、年少の読者にはよみ過ごされてしまうかもしれない。しかし、この小説が出版された 1033 年が、ヒトラー政権が公然と大掛かりなユダヤ人迫害を始めた年であることや、作者ケストナーが反ナチ的自由主義的、民主主義的著述によってナチスに執筆を禁じられ、それでもベルリンにとどまってこの作品をスイスのチューリッヒから出版したことを知れば、この一言が暗に、ナチスのファシズムやユダヤ人迫害に言及した批判であったと感じられる。彼は、ファシズムや人権

侵害や、迫害への動きを見て見ぬふりをしている人々に批判と警告を発したのではないだろうか。

ホロコーストの時に世界がユダヤ人に対する迫害や大量虐殺を見て見ぬふりをしたことは、様々な筋から証言されている。1944 年の夏から秋にかけて世界ユダヤ人議会と世界難民局は米国の陸軍省にアウシュヴィッツの爆撃要請をしたが、その要請は却下された。その理由は、爆撃は多くのユダヤ人囚人の命を奪うことになり、しかも、他の地域で重要な戦闘行為に従事している空軍をここに移動してこなければできないということなどであった。しかし、そのような要請却下の答えがなされてからわずか 1 週間以内に米国陸軍の戦闘機は、アウシュヴィッツ・ビルケナウ絶滅収容所から 8 キロ足らずに位置する I.G. ファルベン合成オイルとゴム工場の集中爆撃を実施した[4]。米国陸軍があえてアウシュヴィッツ爆撃を行なわなかった理由は、本当に、航空部隊を他の地域で用いる必要だったのだろうか。

ハンナ・アーラントは、他国がアウシュヴィッツ絶滅収容所を知りながら大量虐殺を止めなかった理由の一つに、当時の西欧諸国が抱えていた国内の少数民族や難民の問題を考えている。余剰就業人口の出る不況時にフランスなどは外国籍の住民を強制送還したが、少数民族や難民、無国籍の者たちの場合、強制送還によって国外に駆逐することはできなかった[5]。

> 両大戦にはさまれた時期にはユダヤ人問題は少数民族問題と無国籍者問題を二つながらに含み、それらを典型的に代表していた。そのためこの時期にあってはまだ比較的容易にこの双方の問題の影響範囲の大きさを無視し、それらはもともと特別な掟に従っているユダヤ民族の運命にとってしか重要性を持たないと言い逃れることができた。こうして人々は特に次の点を看過してしまった。すなわちユダヤ人問題のヒトラー流の解決——まずドイツ・ユダヤ人をドイツにおける非公認の少数民族の地位に追い込み、次には無国籍者にして国境から追放し、最後にはふたたびひとり残さず寄せ集めて絶滅収容所に送り込んだ——は少数民族問題と無国籍者問題のすべてを現実に「処理」し得る方法を全世界に向かってこの上なく明確に示したということである。そして戦後になって明らかとなったことは、唯一の解決不可能な問題とされていたユダヤ人問題が解決され得たこと、しかもその方法は最初は徐々に入植しそれから力ずくで領土を奪うことだったこと、だがこれによって少数民族問題と無国籍問題が解決したわけではなく、その逆にユダヤ人問題の解決は今世紀のほとんどすべての出来事と同じように別の新たなカテゴリー、つまりアラブ人難民を生み、無国籍者・無権利者の数をさらに 70 万または 80 万人も殖やしてしまったことだった。そしてパレステナの狭い土地で数十万人の規模で起こったことは、今度は広大なインド大陸で数百万という規模でくり返された。難民と無国籍者は 1919-1920 年の平和条約以来、国民国家をモデルとして新設された世界のすべての国々に呪詛のようにまといついている。[6]

他国にとって、ナチスの手からユダヤ人を救うことは、そのユダヤ人を難民として抱えることだった。そのような形であえてコミットするよりも、知らぬふりをしていたほうが無難だとのことだったのであろう。

国家レベルでなくとも、多くの一般市民のアウシュヴィッツについての沈黙についてプリーモ・レーヴィは、アウシュヴィッツの大虐殺が、周りの人々に詳しくは知られていなかっ

たと述べ、そのことについて、次のように書いている。

> 情報を得る可能性がいくつもあったのに、それでも大多数のドイツ人は知らなかった、それは知りたくなかったから、無知のままでいたいと望んだからだ。国家が行使してくるテロリズムは、確かに、抵抗不可能なほど強力な武器だ。だが全体的に見て、ドイツ国民がまったく抵抗を試みなかった、というのは事実だ。ヒットラーのドイツには特殊なたしなみが広まっていた。知っているものは語らず、知らないものは質問をせず、質問をされても答えない、というたしなみだ。こうして一般のドイツ市民は無知に安住し、その上に殻をかぶせた。ナチズムへの同意に対する無罪証明に、無知を用いたのだ。[…] 知り、知らせることは、ナチズムから距離をとる一つの方法だった（そして結局、さほど危険ではなかった）。ドイツ国民は全体的に見て、そうしようとしなかった、この考え抜かれた意図的な怠慢こそ犯罪行為だ、と私は考える。[7]

III　善意の反対は無関心である

アウシュヴィッツの生存者であり、ノーベル平和賞を受賞したエリ・ヴィーゼルは、善意の反対は敵意ではない、無関心であると訴えている。

> 神はわれわれとともにいる。苦しみの最中にでさえも？　苦しみの最中にでさえもだ。ある意味で、その苦しみに無関心であることが人間を非人間的にするものなのだ。無関心は結局、怒りや憎しみよりも危険だ。怒りは時に創造的になり得る。偉大な詩や、偉大な交響曲を書くことにつながったりする。目撃した不正への怒りから、人類のために特別なことを行なう人もいる。しかし無関心が創造的であることはあり得ない。憎しみでさえ時に応答を引き出すことがある。人は憎しみと戦い、憎しみを非難し、憎しみをやわらげさせたりする。しかし、無関心は何も応答を引き出さない。無関心は応答ではない。無関心ははじめではない、終わりである。そして、それゆえ、無関心は常に敵の友なのだ。無関心は侵略者の側の益となる――決して、犠牲者の益とはならず、被害者の痛みは自分が忘れられていると感じるとき、さらに強くなる。独房の政治犯、飢えた子どもたち、家のない難民たち――彼らの窮状に応答しないこと、彼らの孤独をやわらげる希望の光を与えないことは、彼らを人間の記憶から追放することだ。だから、無関心は罪であるだけではなく、罰でもある。[…]
>
> そして、われわれの唯一の惨めな慰めは、われわれはアウシュヴィッツとトレブリンカは固く秘密にされていると信じていたことだ。われわれは信じていた。自由世界の指導者たちはこれらの黒い門と鉄条網の背後に何があるのかを知らないのだ、彼らは、ヒトラーの軍とその加担者たちが同盟軍との戦争の一部として遂行しているユダヤ人に対する戦争のことを全く知らないのだ、もし知っていたら、とわれわれは考えていた、たしかにこれらの指導者たちは天と地を動かして介入させるだろうと。彼らは声を大にして大きな怒りと確信を叫んでいただろう。彼らはビルケナウに続く鉄道を爆破しただろう、鉄道だけでも、たった一度でも。
>
> しかし今、われわれは知っている。合衆国国防総省も、合衆国国務省も知っていたということを、われわれは知った、発見したのだ。[…]

セントルイス号のひどい話は、典型的な例だ。60年前、乗っていた人々――1000人近いユダヤ人――はナチスドイツに送り返された。そしてそれは、水晶の夜の後、つまり、国家を後ろ盾とする最初のポグロムで何百人ものユダヤ人が殺され、シナゴーグが焼かれ、何千人もの人々が強制収容所に入れられた後のことだった。そして、その船はすでに合衆国の沿岸まで来ていたのに送り返されたのだ。分からない。ルーズベルトは思いやりのある良い人だった。助けを必要とする人を理解できた。

なぜ彼はあの難民たちを上陸させてくれなかったのか。[8]

他人に対する無関心は、苦境にいる人々の命にかかわることさえあり、その場合には、人を見殺しにする行為となる。極限的な迫害などの場合には、無関心は殺人を傍観することによって、殺人を容認し、殺人者の側に立って人を殺す行為となってきたのだ。意識的な殺人行為が行なわれない場合であっても、窮乏状態にある人たちへの周りの無関心が、その人たちの低栄養や必要な冷暖房の欠如を看過し、その人たちの死亡につながっているケースはわれわれの現代社会にもしばしば起こっていることである。

ジャン・アメリー、プリーモ・レーヴィ、エリ・ヴィーゼルらのアウシュヴィッツ生き残り作家たちは、ホロコーストの事実に目をつぶって理解しようとしない世界に収容所の事実を証言し、世界がこのことを記憶し、同じ間違いを犯さないように訴えた。しかし、世界は過去の過ちにはあまり学んでいないように見えた。

ジャン・アメリーは1943年にナチス・ドイツに逮捕され1945年まで、アウシュヴィッツなど、複数の収容所を体験してやっと生き延びた。しかし解放から33年後の1978年、自死によってその生を絶ってしまったのである。彼はアウシュヴィッツ後、作家として、評論家として、人間や世界に対して絶望しながらもホロコーストの悲劇を訴えつづけてきた。そして、それが彼に、生きる一つの意味を与えていた。それは、彼にとっていわば押し付けられた使命のようなものであったように彼は書いている。

人と話していて、こんなことがある。何かのはずみに相手が急に私をも含めた複数形でこう言う。

「われわれユダヤ人は……」

こんな時、私は強いとまではいわないにせよ、何か重く苦しいような不快感を覚える。その苦痛をともなった不快感がいったい何ものなのか、ながらく私は考えてきた。[…]ユダヤ人でありたくないからではない。ユダヤ人でありえないのに、にもかかわらずユダヤ人でなくてはならないからである。そしてこの「なくてはならない」に単に身をゆだねているのではなく、はっきりとそれを人間としての自分の一部として要求する。ユダヤ人であることの強制と不可能性、漠然と苦痛を生み出すのはそれだろう。[…]

ユダヤ人であることが、他のユダヤ人と同じ信仰を分かち持ち、ユダヤ人の文化や家族の伝統をたっとび、ユダヤの国家理念を養うことだとしたら、私はとうていユダヤ人でありえない。私はイスラエルの神を信じていない。ユダヤの文化をほとんど知らない。[9]

彼は、ユダヤ人であろうとはしなかったが、生き残りのユダヤ人としてしか生きられなかったのである。このようなアメリーにとって、1972年から翌73年にかけて、ベトナム戦争で

アメリカがハノイ・ハイフォンの両都市を爆撃した様を目にしたことは致命的であった。

> ハノイ、ハイフォンの両都市がニクソンによって「叩き潰」された。――かつてヒトラーが、イギリスの諸都市にむかって同じことを誓った。違う点は、1940年の大言壮語がこの1972年には、人殺しの現実、しかも自由に関する巧言を伴った人殺しの現実となったことである。ひどい嘔吐感が私を襲った。今日でも私の上に垂れこめた、むかつくような霧はまだ晴れない。[10]

> 1972年から73年にかけて、政治的な冬に起きたもろもろの現象を前にして、嘔吐感が私を襲った。それにつれ強迫観念のような激しさで、ヒトラーがあの汚辱の帝国を使って落とし戸を開け、そこから人類が人類を否定する奈落に落ちたのだという確信が湧き起こった。［…］私の存在の非合理が私の内部で私に立ち塞がった。なぜ私はとうに負けた勝負をまだ調子を合わせて続けていたのか？なぜくだらない日常の心配事を馬鹿馬鹿しくも本気にとって、出版社や放送局に手紙を出していたのか？[11]

自分が30年近く訴え続けてきたことが、何も違いをもたらさなかったことは、彼から生きる意味を奪ってしまうほどの打撃だった。

プリーモ・レーヴィもまた、自分がアウシュヴィッツから解放されたのち、「作家＝証人として」生きてきたことを書いている。[12] レーヴィは作家として成功し、多くの人々は、彼が収容所の心傷を克服したと考えていた。ところが、彼は1987年、解放から42年も経ってから自宅のアパートで飛び降り自殺をして、突然命を絶ってしまったのである。

エリ・ヴィーゼルは彼の死に衝撃を受け、自伝『しかし海は満ちることなく』に

> イタリアで彼は読まれ、讃えられ、栄誉を受け、だがうまくいかなかったのだ。｛…｝彼は自分のメッセージが受け取られもせず、伝えられもしないと考えた。もっと悪いのは、伝えられたのに何も変わらなかった場合だ。彼は社会や人間の本性になんの影響も及ぼさなかったことになる。まるで人類が彼を使者とした死者たちを忘れ去ったように、すべてが過ぎていく。あたかも彼が死者たちの遺言を紛失したかのようにだ。[13]

と書いている。不正や暴力がなされる時、周りの世界が自分たちをそれとは無関係なものとして傍観しているとき、あるいは、飢えた人々、住むところのない人々が苦しんでいるとき、それを他人事として、あるいは、どうせ自分には何もできないからと見てみないふりをするとき、不正や社会的不平等や不幸は悪化する。

エマニュエル・レヴィナスは、他人の窮地に対して実践的に助けの手を差し伸べることは、してもしなくてもよいことではなく、人間としての根源的な責任の問題であると強調している。

> 人間性とは他人への愛であり、隣人に対する責任であり、場合によっては「他人のために、他人の代わりに死ぬこと」であり、犠牲である。しかもこの犠牲は、他人の死が私自身の死に先立って、私自身の死以上に私を思い悩ませることもあり得るという、常軌

を逸した考えにまで導くものなのです。[14]

モーセと預言者たちは、魂の不変性ではなく、貧者、寡婦、孤児、異邦人を気にかけています。神との接触は人間との関係において実現されますが、この関係は精神的友愛の一種ではなく、正当で各人が完全に責任を担うエコノミーのうちに現出し、感得され、実現されるものです。[…] 人間に対する人間の個人的責任は、神が取り消し得ないものです。ラビによる仲介では、「私は弟の番人でしょうか」という神とカインの対話が取り上げられています。[…] この問いは、まだ人間的連帯を感じたことがなく、(現代の哲学者たちの多くと同様) 各人は自己のために存在し、すべてが許されていると考える者から到来します。しかし神はこの殺人者に、彼の罪が自然の秩序を乱したことを明らかにします。すると聖書は、カインの口に服従の言葉を語らせます。「私の罪は重すぎて担えません。」ラビたちは、この答えに新たな問いを読み取るふりをします。[…] ユダヤの叡智は、創造し、全世界を支える者も、人間が人間に対して犯す罪は担うことも赦すこともできないと教えます。[15]

「私は弟の番人でしょうか」との問いはここで、「私はいつも弟を見まもり、弟に対して責任を持たねばならないのでしょうか」という意味で、連帯的責任の所在を否定しようとする問いと理解されている。レヴィナスは弱者に対する支援を、余力のある者が気の向いた時に行なえばよいというような任意の行為ではなく、人間性に根源的に要求される責任であると認識している。そして、人間は、相手が知人であろうとなかろうと、他人に対して責任を負う存在であると訴える。

実際、この根源的責任を果たさぬ世界が、ナチスによるユダヤ人絶滅計画の実行を看過し、600 万人ものユダヤ人の殺戮を可能にしたのである。

IV　ユダヤ-キリスト教の伝統

助けが必要な人々や不正義に対して目を閉ざさず、実践的に助けを差し出すべきであるという積極的な促しは、旧約聖書から新約聖書まで一貫してユダヤ - キリスト教の指針の中心にある。レヴィナスが指摘したように、旧約聖書の預言者たちは常に社会的弱者を搾取する人々を弾劾し弱者への気配りを求めた。

主はこう言われる。イスラエルの三つの罪、四つの罪のゆえに、わたしは決して赦さない。彼らが正しい者を金で、貧しい者を靴一足の値で売ったからだ。彼らは弱い者の頭を地の塵に踏みつけ、悩む者の道を曲げている。父も子も同じ女のもとに通い、わたしの聖なる名を汚している。(アモス 2:6-7)

裁きのために、わたしはあなたたちに近づき、直ちに告発する。呪術を行なう者、姦淫する者、偽って誓う者、雇い人の賃金を不正に奪う者、寡婦、孤児、寄留者を苦しめる者、わたしを畏れぬ者らを、と万軍の主は言われる。(マラキ 3: 5)

善を行なうことを学び、裁きをどこまでも実行して、搾取する者を懲らし、孤児の権利

を守り、やもめの訴えを弁護せよ。論じ合おうではないか、と主は言われる。たとえ、お前たちの罪が緋のようでも、雪のように白くなることができる。（イザヤ 1:17-18）

主はこう言われる。正義と恵みの業を行ない、搾取されている者を虐げる者の手から救え。寄留の外国人、孤児、寡婦を苦しめ、虐げてはならない。またこの地で、無実の人の血を流してはならない。（エレミヤ 22:3）

さらに、弱者を積極的に助ける心配りは、申命記や箴言の以下の戒めによって促され、命じられている。

あなたのうちに嗣業の割り当てのないレビ人や、町の中にいる寄留者、孤児、寡婦がそれを食べて満ち足りることができるようにしなさい。そうすれば、あなたの行なうすべての手の業について、あなたの神、主はあなたを祝福するであろう。（申命記 14:29）

オリーブの実を打ち落とすときは、後で枝をくまなく捜してはならない。それは寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい。ぶどうの取り入れをするときは、後で摘み尽くしてはならない。それは寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい。あなたは、エジプトの国で奴隷であったことを思い起こしなさい。わたしはそれゆえ、あなたにこのことを行なうように命じるのである。（申命記 24:20-22）

貧しい人に与える人は欠乏することがない。目を覆っている者は多くの呪いを受ける。（箴言 28:27）

貧しい人たちへの積極的な援助の要請は、新約聖書にも明示されている。ヤコブの手紙にはこうある。

わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行ないが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだれかが、彼らに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。行ないが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。（2:14-17）

これは、食べるもの着るものに事欠く人々への実践的な援助にたとえて実践的な信仰を求めている。しかしこれは、単なるたとえや比喩ではない。信仰が要請する行ないについては、そもそも、イエスが最も大切な教えとして、神を愛することと、「自分自身を愛するように隣人を愛すること」（マタイ 19:19、マルコ 12:31）を挙げており、イエスの宣教活動自体、病の人々には癒しを（マタイ 9:27-31；20:29-34、マルコ 1:40-42；5:25-29；ルカ 17:11-19 など）空腹な人々には食べ物を（マルコ 6:34-44 8:1-10 およびその並行個所）、職業などのため

に偏見に苦しむ人にはその苦しみからの解放を（ルカ 19:2-9）与えて、実践的な隣人愛を行なうものであった。彼はまた、貧しい人々からさえも税や捧げものを取り立てる神殿祭司たちの在り方を批判し、神殿に献金や捧げものをしに来た人々を相手に商売している両替商や物売りを追い出し、本来祈りの家であるべき神殿を彼らが強盗の巣にしてしまったと非難している（マルコ 11:15-17 およびその並行個所）。そのような目立った活動や神殿批判が当局に危険視されることとなり、それが彼の十字架の死につながるのである。

このように旧約聖書でも、新約聖書でも、他の人々の困窮状態や不幸に目をつぶらないこと、実際に助けの手を伸ばすことがこれらの宗教において非常な重要性を持つものとして勧められている。キリスト教や、その母体であり、キリスト教が旧約聖書と呼ぶ正典を聖書とするユダヤ教では、人々は他人の不幸に責任があり、その責任に応えるかどうかを一人一人が問われていると考えられる。そして、その責任を回避することは、レヴィナスが言う通り、一個の人間存在としての自己のあるべき姿勢を棄てることだと考えられるのである。20 世紀を代表するユダヤ教の神学者の一人である A・ヘッシェルは次のように言っている。

> 神は私たちが依存する力であるばかりではなく、要求したまう神でもあります。何かが私たちに問われており、私たちを必要としている目標がある、という確信によって宗教は始まります。［…］問われているという意識は簡単に抑圧されるものです。なぜなら、それは小さくて静かな告示のこだまだからです。しかしながら、その意識は永遠に抑圧されたままではありません。静かで小さな告示の声が「御言葉を成し遂げる嵐」（詩編 148 編 8 節）のようになる日が来るのです。実際、心の中の死んだような空しさは、生きている人間には耐えることができません。私たちは自分自身に問われていることを知らないならば、生き残ることができないのです。［…］
> 人間はその実存のすべての段階において、避けることのできない本質的な挑戦を受けているのです。人間が自分を一個の人間存在として見出すのは、挑戦を受けているということの中においてです。私は人間存在として実存しているのでしょうか。私の答えは、我命令される――故に我在り、ということです。人間の意識の中には負債感が内在し、帰すべき感謝の意識があり、またある瞬間には、生の荘厳さと神秘とに調和するような方法で反応し解答し生きることを求められているという意識があります。［…］人間は命令されている存在であり、その要求を感知する時に意味の中に入ってゆくのです。私たちに求められていることを理解できないことが、不安の根源です。私たちの実存的負債を受け入れることが、正気に至る先行条件なのです。世界は人間が造ったものではありません。地球は神のものであり、遺棄物ではありません。私たちが所有しているものを、実は私たちは借りているのです。「主はわたしに報いてくださった。わたしはどのように答えようか！」（詩編 116 編 12 節）。［…］
> 私たちが行なうすべての行為によって、私たちが遂行するすべての行動によって、私たちは贖いのドラマを進行させるのか妨害するのか、すなわち、悪の力を減退させるのか増大させるのか、どちらかを行なっているのです。[16]

私たちが行なうすべての行為によって、私たちは悪の力を減退させるのか増大させるのか、どちらかを行なっている、という彼の言葉は、われわれが民族殺戮や民族差別を看過するこ

とがその悪を増大させることになるとの先に見た考えと通じる。

V　まとめの考察

不正や思想統制、弱い人々の迫害などは、それが政府や権力者の行為である場合は特に、一般の人々にとってはそれに抗議することはやりにくく、黙っている方が自分の身にとって無難であるとの考えに縛られて動けなくなりがちである。政府に反対する人々が拘束されたり、社会的不利益を被ったりすることがあれば、それを見た他の人々はますます何も言えなくなるであろう。それがアウシュヴィッツにつながったのであり、日本の戦前や戦争中の体制下でも同様に、国が誤った方向に進んでゆくのを止められなかった理由の一つになった。大きな社会不正義は、ある程度以上に大きくなってしまうと容易には止められなくなってしまう。重大な社会不正義が起こった時、起こりつつあるときに他の人々がそれを他人事として見ているのではなく、反対や抗議の声を上げることが当然すべきことであり、そうしないのは悪であり罪であるとの認識はアウシュヴィッツ後に強くなってきたように見えるが、それが今日のブラックライフズマター運動などにつながっているのであれば、エリ・ヴィーゼルらが「善意の反対は無関心である」と呼びかけた声が少しずつ届いているということであろう。

社会不正義や悪に反対し、困っている人に助けの手を伸ばすためには、常に目を開き、常に自分自身で考えて、今何が起こっているのかを見極め、不正義の側に流されないこと、そして、自分が今何を求められているのかを考えて生きる姿勢と、責任を果たす勇気が必要である。それは決してたやすいことではないが、今、一般の若い人たちが（そして、年配の人たちも）様々な社会不正義に、デモや、インターネットの署名や書き込みなどで反対の声を上げ、その声が大きくまとまって社会を変えてゆく現象が起こってきている。黒人差別や、再び表面化してきたユダヤ人差別、イスラム教徒への差別などに対してもっとも大きな抑止力となるのは一般の人々の反対意識の表明、明確な「否」の声であろう。ケストナーやヴィーゼルが注意を喚起した無関心という形の悪は恐ろしい結果を生みうるが、それに抗することは気力と勇気さえあれば誰にでもできるのである。そして重要なことは、止めるべき恐ろしい方向への動きや不正義が、一般の声によっては止められないほどの大きな力になってしまってからでは、善意の声で悪を抑止することはできなくなってしまうということが、アウシュヴィッツや第二次大戦への日本の歩みで例証されていることである。われわれは今、そのような事例を繰り返さないための警鐘として、「善意の反対は敵意ではなく無関心である」というヴィーゼルの言葉に耳を傾け、無関心という形の悪の存在と危険を改めて認識すべきなのである。

注

1　アウグスティヌス「基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論」『アウグスティヌス著作集 7 ――マニ教駁論集』岡野昌雄訳（教文館, 1979), 第三五章, pp.161-162.

2　アウグスティヌス『神の国』（三), 12 巻 22 章, pp.161-162. また、（三）13 巻 1 章, p.177 も参照のこと。

3　エーリッヒ・ケストナー『飛ぶ教室』, 池田佳代子訳, 岩波少年文庫, 2006), p.143.

4　Cf. The United States Holocaust Memorial Museum, “The United States and the Holocaust: Why Auschwitz was not Bombed,” retrieved from https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/the-united-states-

and-the-holocaust-why-auschwitz-was-not-bombed（2020 年 9 月 29 日参照）.

5 ハンナ・アーレント『全体主義の起源 1　反ユダヤ主義』大久保和郎訳（みすず書房, 2017）, pp.292-293.

6 アーレント『全体主義の起源 1　反ユダヤ主義』, pp.302-303.

7 プリーモ・レーヴィ『アウシュヴィッツは終わらない　これが人間か』竹山博英訳, 朝日新聞出版, 2017.（Levi, Primo. *Se questo è un uomo*. De Silva, 1947.）, p. 226.

8 Elie Wiesel, "The Perils of Indifference, delivered 12 April 1999, Washington, D.C.," retrieved on 11 July, 2020 from https://www.americanrhetoric.com/speeches/ewieselperilsofindifference.html

9 アメリー「ユダヤ人であることの強制、ならびにその不可能性について」『罪と罰の彼岸』, pp.147-8.

10 ジャン・アメリー「なぜ、どんなふうに」『ルフー、あるいは取り壊し』神崎巌訳（法政大学出版局, 1985）, p. 194.

11 アメリー「なぜ、どんなふうに」『ルフー、あるいは取り壊し』, p.200.

12 プリーモ・レーヴィ『アウシュヴィッツは終わらない』竹山博英訳（朝日新聞社, 1995）, p. 243.

13 エリ・ヴィーゼル『しかし海は満ちることなく』（下）村上光彦 , 平野新介訳（朝日新聞社, 1999）, pp.300-301.

14 エマニュエル・レヴィナス『われわれの間で』合田正人、谷口博史訳（法政大学出版局, 1993）, p.325.

15 エマニュエル・レヴィナス『困難な自由』合田正人監訳、三浦直希訳（法政大学出版局, 2008）, p.27.

16 A・ヘッシェル『人間とは誰か』中村匡克訳（日本基督教団出版局, 1977, 新版 2015）, pp.186-201.